

福田きくさん

1928(昭和3)年1月23日生まれ

当時の本籍地 千葉県

日本赤十字社救援看護婦

相武台陸軍病院

神奈川県相模原



●1942(昭和17)年 日本赤十字社の看護学校千葉支部に入学

高等小学校在学中に父親が43歳で亡くなった。勉強を続けたかったので、校長先生に相談に行った。そこで、日赤の看護学校を勧められた。20名に200人以上が受ける難関で、合格発表を見に行かなかつたら合格の電報が来て、祖父が一升瓶を持って校長室にやって来た。

埼玉支部と一緒に大宮赤十字病院の寮に入る。3年間のカリキュラムを2年に短縮しているの、休みは月2回の午後だけ。

●1944(昭和19)年7月召集、振武台陸軍病院に

1日、警察からピンク色の召集令状が来た。7日には出発。地元の人が、旗を持って送ってくれた。

列車に乗せられ、外地か内地かも分からなかったが、振武台陸軍病院に。結核病棟担当で、患者150名に看護婦は3名。結核患者が吐血した場合、止血剤もないので、衛生兵に肺を冷やしてもらう。

●1944(昭和19)年12月 相武台陸軍病院(神奈川県相模原)に転院

転勤命令がきた。外地へ行くかもしれないと思って、母が面会に来たが転属先は内地だった。

尿器も無く、薬の空き瓶が使用されていた。そのため、こぼれてしまうことも多い。

病院船から患者を病院へ運んでくる。船がどこから来たのかわからない。病院へ来る患者は全員が栄養失調で、意識が朦朧とし、口をきける人がいなかった。蚤や虱だらけで、毎日亡くなっていく。おかゆをあげると涙をぼろぼろこぼす。亡くなっていく人のほとんどは、「おかあさん。」と最期に言った。苦しんでベッドから落ちる人もいた。

精神病患者も多かった。精神病棟は看護婦はおらず衛生兵のみ。精神病患者に追いかけられたこともあった。

3日に1度当直。50名の患者がいる重症病棟を看護婦2名で担当する。不眠不休とはあのこと。知らない間に死んでいる人がいる。毎日亡くなるから、患者はどんどん入れ替わる。遺体は衛生兵が運んでいたようだ。

病院での仕事は、蛆虫を取って、ごはんを食べさせて、尿器を取って…看護婦らしい仕事はしていない。

●病に倒れる

多少具合が悪くても、自分が休んだら看護婦が1人になってしまうので、熱があっても仕事をしていたら、倒れて起きられなくなった。終戦2カ月前のこと。

肺浸潤だった。麻酔もしないで、肺にたまった水を取るの、とにかく痛い。死ぬんじゃないかなと思った。

病院でお世話をした人の中に、院長付きの士官がいた。その人が、チーズやバターを差し入れしてくれた。

●1945(昭和20)年8月15日 敗戦

その士官から8月12日に、「ここにいたら、ぜったい駄目です。お母さんのいるところへ帰りなさい。」と言われた。意味が分からなかった。その3日後に、這うように廊下に出て玉音放送を聞いた。8月18日実家に帰った。

相武台陸軍病院はアメリカ軍が接收した。病院の周りは焼け野原なのに、病院は攻撃されなかったから、初めから戦争が終わったらアメリカは使うつもりでいたのだと思う。9月1日までに退去せよと命令され、赤羽の近衛師団の跡地にトラックで患者を輸送したと聞く。

●1946(昭和21)年～1952(昭和27)年 国立王子病院に勤務

当初は傷痍軍人を診たが、気が荒れていて大変だった。その後引揚げの子どもやお母さんを診るようになり、一般の人を診るようになったのは数年してから。

(取材日 2017年11月18日)